君わが妻とならむ日の四月なかなか遠くもあるかな」を思い出させる。美智子上皇后ゆかりの一首だ。期待に満ちた「吾の最後の新車くる」というフレーズに実感がこもる。自動車大好きな作者なのだろう。

新聞の訃報を見逃し老優はわたしのなかで一年生きた　鈴木陽美

現在ほど情報化されていなかった時代では当たり前のことだったろうが、情報氾濫時代の現在ではおどろくべきことなのだ。志村けんがまだ生きていると思っている人に先日会ったが。

全員が陰性、部活再開の校長メールの文字が喜ぶ　山口明子

結果がでるまでの、校長、教員、生徒の心配、緊張が読める一首。コロナ禍に振り回される教員の人たちの心労はたいへんなものらしい。この作者は中学校の教員だが、今月の一連に、三年生として一度も戦うことなく卒業してゆかざるをえなかった運動部員の悔しさをうたった歌があった。教員だけではなく生徒たちもまた、欲求不満の多い一年だったのだ。

点滴を連れて厠へ行くことに慣れて素直な病人となる　北川秀子

入院生活に取材した今月の五首、どれもなかなかの作。「素直な病人」になかなかなれなかった長い時間が読者に伝わってくる。病院に行くと車輪のついた点滴の機械をつけたまま廊下を歩いている人を見かけることがある。あの状態を、簡潔に「点滴を連れて」と表現した工夫もなかなか。

放課後のこどものやうに散る桜ぼくのどこへも行かない春を　喜多宣夫

上句の比喩は、花吹雪イコール自由奔放に、の意味だろう。下句は逆に、自由でも奔放でもない「ぼく」の状態の表現らしい。「春」を背景にシンプルな対比を前面に出して骨太の一首に仕上げた。

みどりごのゐるやすけさにひよひよと泣く声満ちる　弥生玻璃ぬち

この歌の三首前に「……ふくふくとしたをみなご生れぬ」とあって、生まれて間もない赤ちゃんがいる家の空気を歌った一連である。赤ちゃんそのものをうたうのではなく、赤ちゃんのいる家の空気をうたおうとしている点に注目した。

免許返納明日からは海を見て野の花を見て下る坂道　北澤道子

運転免許の返納は、本人にとっては大事件である。それまで何十年も運転して通った道を、自分の足で歩き、公共交通機関を使って通わなければならない。この作者の今月の作は、すべて運転免許返納にかかわる歌。海そして野の花、都会の人間にはうらやましい坂道である。

お腹へつてくれば積木を齧つてる美味しくはないと思ふのだけど　松井千也子

介護の歌である。認知症の母の行いを描写するのはつらいことだろうと思うが、あえてそこに踏み込んで表現した一首。下句のユーモアを味わいたい。　高山邦男